

スーパー技能者を目指せ 高松文三

10年近くレストランで働いたことがある。

来る日も来る日も、野菜を切り、えびの皮をむき、天ぶらを揚げるという毎日で、うんざりした思いがある。私が働いていた日本レストランは、今でこそ従業員30人近い中型レストランだが、私が入った頃は、オーナー夫妻が中心になってなにからなにまでやるという、小さなレストランだった。はっきり言って全員素人ばかりで、それでも何とか今のような成功をおさめたのは、オーナー夫妻の努力もさることながら、アメリカという国の寛容さにあると思う。

私が働き始めてから半年ばかりして、本物の料理人がやってきた。フランスでコックの修行もやり、日本でもさまざまな料理を学んできた人で、その職人芸に我々は舌を巻いた。

この人がよく私にこう言った。

「文三さん、このアメリカちゅう国は職人の育たん国やね。」

アメリカ人には、“1つの道を長く続けてゆくだけの根気がない”という。“特に職人の世界は上下関係が厳しく、なんでも横で繋がろうとするアメリカ人には、まずついていけない世界だ”ということらしい。

私が思うに、今一つアメリカ人は言語表現に頼り過ぎるきらいがある。確かにアメリカ人は一般的に言って、日本人より言語表現がうまい。一方日本は元来、言霊の国といわれ、言挙げしないことを美德とする。私が小さいころ、親父から“男は日に三口でよい”、要するにあまりしゃべるなとか、自慢、言い訳、弁解の類は恥ずべきことというような教育を受けた。黙っていても威力が発揮できるのは、日本社会の特色のひとつではあるまいか。

アメリカでは黙っていればただのバカとしか見てくれない。在米20年のわたしも、未だにこの使い分けをうまくやり切れない。これは単に不器用な男の言い訳にすぎないが、しかし言葉に限界があることをアメリカの人はもっと認識すべきだと思う。

先日、テレビで“スーパー技能者を探せ”という番組を見た。

車にせよ、電化製品にせよ、日本製品の高品質を支えてきた職人―彼らを高度熟練技術者（スーパー技能者）と呼ぶ―が、今減りつつあるという。

スーパー技能者とは、

- ・工作機械を超える加工精度を生み出せる者
 - ・五感で仕上がり具合を把握する能力を持った者
 - ・設計図にない独自の工夫や判断能力を持った者
- というように定義されている。

例えば100分の1ミリの精度を出せる旋盤があるとすると、スーパー技能者はその旋盤を使って1000の1ミリの精度をつくり出せる。一番精密度が要求される仕事は、機械では限界があり、その限界を超えるのが職人の技である。

ところが、これらの人たちはすべて中高年層で、若い後継者がいないという問題が生じている。何年も何十年もかかってやつとを習得できるというような、地味で根気がいる仕事を今の若者はやりたがらないという。

そこで日本政府はそういう技術を持った人たちを高度熟練技術者として正式に評価した。何とか、そういう技術を次の世代に伝えていくための第1歩である。そして各企業でも彼らの技術をビデオ取りしたり、マニュアルを作ったりという対策を講じ始めた。

スーパー技能者たちも、技術の継承には大賛成なのだが、なかなかうまく行かない。このたび、スーパー技能者と認定された1人の老旋盤工に言わせると、

「口で言ってわかるような技術なら、もともと大した技術ではない。肝心なところは言いようもないし、書きようもないし、身体で覚えていくしかない。」

言ってみれば、“師匠と同じ空気を吸って、何年もかけて学ぶしか方法がない。真に伝えるべきは不立文字”ということらしい。

何でもマニュアル化できると思うのは、アメリカの幻想である。マニュアル化してしかるべき製品は多々あるし、その存在価値も認める。が“世の中すべてマニュアル製品ばかりだとしたら、如何ほど味気ないだろう”と思う。しかし今は確実にその方向に進んでいる。

医学界も例外ではない。検査は器械がやり、医者がやるのは数字合わせだけだ。マニュアルさえあれば誰でも出来そうである。外科の分野は、まだ職人的技術が生かせる唯一の分野ではないかと想像する。

翻って東洋医学はどうか。

東洋医学は、まだまだ個人芸がモノをいう領域で、マニュアル化は進んでいないようだ。ただこれも一長一短である。マニュアル化の良いところは技術が平均化することだ。どこでも、ある一定水準の技術が期待できる。一方ノーマニュアルの世界は玉石混交で、あまりにもバラツキがありすぎる。名人ともなると、病院で何日もかかって下すような診断を、顔を見ただけで瞬時に下すことも稀ではない。不思議と何でも治してしまうような治療名人もいる。未だに名人芸や神業の発揮できる世界だ。ただ、その逆にトンデモナイ者も結構いる。私もその1人なのかもしれない。

敢えて言い訳をさせてもらえば、私はアメリカの鍼灸学校を20年近く前に卒業し、誰か特別な師匠を持つという幸運に恵まれなかった。師匠につけば、うまくなると思うのは日本的幻想の一つなのかもしれない。誰にもつかずに、一流の鍼灸師になった人もいる。長野潔先生も特別な師匠はなかったと聞く。がやはり、先生のような人は稀である。

では私のような凡人が高度熟練技術者にはなるのは不可能なのだろうか。まして、私はもう40歳も半ばである。子供も4人いる。今さら誰かの弟子になるというのは不可能ではないにせよ、非常に難しい。さてどうしたものか。

高松文三, D.O.M., L.Ac.

1982年、ニューメキシコ・サンタフェのKototama Instituteを卒業。1988年よりダラスにて開業、現在に至る。鍼灸に加え操体法、マクロバイオティックも指導する。現在、テキサス州・ダラス市にて開業する。

